Julien Sorelのhypocrisieと読み手の問題

粕　谷　雄　一

1．本論の目的

hypocrisieというフランス語には普通「偽善」という訳語をあてるが，両語の間にニュアンスの差があることは否めない。辞書の定義を見ても,「偽善」が「本心からではなく，みせかけにする善事」(広辞苑)，「うわべだけを飾って正しいように，あるいは善人のようにみせかけること」(小学館日本国語大辞典）と定義され反対語は両辞典とも「偽悪」となっているのに対し，hypocrisieの方は「本当の性向や思想を隠したり，実際には持っていない意見や感情や美徳を装う人物の性格，態度。〈反対語〉卒直，忠実，誠実」(*Grand Robert*[1])とある。このことからも，またhypocriteの語源である古典ギリシア話のhypokritēsが本来「芝居の役者」を意味していたことからもわかるように，hypocrisieの語の意味の核心は「外面と内面が一致していないこと」にある。このことから本論では立身出世のために信仰などを装うことに加え，恋愛におけるかけひきのためにわざと感情を偽るようなことも全て「普通の意味でのhypocrisie」に含まれるものとして扱うことにする。

本論は,『赤と黒』の主人公Julien Sorelのhypocrisieの分析を通して「読み」という行為の探求に新たな可能性を提起しようという試みである。目下の筆者の関心は論理的整合性にあるので，あるいは一部の概念――特に「信仰」と「愛情」――の扱いが単純すぎるきらいがあるかもしれない。一つ一つの断定の哲学的吟味が今後の課題として残されているのである。

2．普通「Julienはhypocriteである」が読みの前提になっている。

Julien Sorelの性格を云々する際必ず問題になってくるのが他ならぬ彼のhypocrisieである。読み手によっては陰険なhypocriteだからというのでJulienを嫌悪したり，またJulienの創造者たるスタンダールを批難したりしたのである。しかしこの作品を愛する読み手たちは，なんとかJulienを正当化してやろうとしてさまざまな論法を用いてきた。

たとえば責めを社会に向ける論法がある。

> Julien Sorelは本当はhypocrite的精神の正反対で騎士道精神の持ち主なのである。〔...〕だがこの大ブルジョワや僧侶の社会では，高潔さ，自然な高貴さ，勇気といっ

たものは，もう通用しない貨幣のようなものである。〔...〕彼は赤の代りに黒を演ずる。サーベルの代りにhypocrisieが生活の道具となるだろう。(Maurice Bardèche[2])

また，彼はhypocrisieのやり方がぎこちないので根っからhypocriteであるわけではない，と説明することもある。

Julienも時には虚偽に身を固めながら「ヒロイズム」に到達するだけのエネルギーをもち，タルチュフ顔まけの言葉を考えだすだけの頭を持っているのだが，そのかわり彼はペテンをするにあたっては，冷静な不誠実さといったものを欠いている。この不誠実さのみが，個人的選択とあいまって恒常心と自然さを保証してくれるのだが。〔...〕Julienはこの種族(fourbe accompli, hypocrite) の人間ではない。(Georges Blin[3])

この他にも論法は枚挙に暇がないが，上の引用からもわかるとおり，この問題が扱われる際にはJulien = hypocriteが自明のものと見做され，その上でさまざまな価値判断が加えられる形になるのである。たとえ「本性上はJulienはhypocriteでない」と結論づけたい論者であっても「事実上はJulienはhypocriteである」を出発点にしているのである。

しかしこの「事実上Julienはhypocriteである」は，果して客観的に証明されうるのだろうか。

hypocriteが外的に認めうる言動と内面とが一致しない人間のことをいうなら，現実の人間をhypocriteと断定するのは究極的には不可能である場合が多い。だがJulienは小説の中の存在であり，人目のとどかないところでの彼の行動や隠された心の中まで読み手は知っているのだから100%確実にhypocriteか否か言うことができるように思える。これこそ，人は小説の中でしか真実に到達しえないと言えるゆえんなのではないのか。

しかし，以下の考察からもわかるとおり，筆者の立場から言えばこの判断は確実ではないのである。

3．Julienをhypocriteと見ないことも可能である。

Julienがレナル夫人に愛の告白をするところを例にとって考えてみよう。

Julienのつまらぬ虚栄心はなおもつづけるのである。とにかくこの女をものにしとかなくちゃいけない。そうしておけば，いつか出世してから，なんで家庭教師などという下賤な職についたのかと誰かに難くせをつけられても，それは恋のためだったということにできるわけだからな。

Julienはいったん自分の手を夫人の手から離し，再びその手を取って握りしめた。

真夜中近くなって客間に戻るときレナル夫人は小さな声で彼に言った。

「あなた，あたしたちを置いて，どこかへ行ってしまうんですか。」

Julienはため息をつきながら答えた。

「行かなければならないと思います。あなたを心底愛しているからです。これはあやまちです… 若い僧侶にとって，なんて恐しいあやまちでしょう！」(第1部第13章[4])

ここには確かにhypocrisieがあるように見える。口では聖職に課せられた義務と誠実な愛情について語っているくせに，心の中は言葉と全然違う打算的な考えが支配しているからである。加えて我々読み手はJulienが結局レナル夫人「誘惑」に成功することを知っているので，ここに見えるようなhypocrisieをその成功の原因と見做すことが可能なのである。それならばJulienは十分意識した，熟練したhypocriteであって，あとでレナル夫人を本気で愛するようになったとしても，少くともこの時点では愛も，そしてもちろん信仰も存在しないことになる。

しかし可能な解釈はこれだけではない。

仮りにこの場面の彼を，内心の考えは無視して外側からのみ，行動主義的見地に立って眺めてみたとしよう。「事実によって判断してほしい[5]」と言っていたJulienの願いをかなえてやるわけである。すると彼は，僧侶となるべき身にとっての義務とまことの愛情との板ばさみで本当に苦しんでいるあわれな若者と見えてこないだろうか。つまりJulienは本当に信仰を持っているし，レナル夫人を最初の出会い以来一貫して愛しつづけていると考えることが可能だということである。そうすると夫人との密通もhypocrite的な打算ではなく，むしろ男性としてごく自然な衝動に身を委ねてしまった結果であり，彼が批難されねばならないとしたらそれはhypocrisieの故ではなくfaiblesseの故であるということになろう。宗教的信仰の方も同様で，女性関係の問題を除けばJulienは一貫してむしろ相当模範的な神学生なのだから，本人は不信心者のつもりでもそのことを客観的に証明することは困難である。「彼は聖書を全部暗記しております。いったい不信心者が聖書を何年もかけて覚えたりするものでしょうか[6]」と陪審員に訴えかけるときレナル夫人はあながち間違っているとは言えないし，嘘をついているとも言えないのである。

このように「Julienはhypocriteである」と「Julienはhypocriteでない」という2つの命題は『赤と黒』の中において同様に成立すると考えてよい。

4．Julienのhypocrisieはhypocrisieはhypocrisie信仰」であるとしょう。

とは言え，「Julienはhypocriteではない」の方を無条件に成立させるのは確かにためらわれる。読み手は彼の頭の中に陰険な考えがあるのを知っているし，また彼自身「おれの生涯はhypocrisieの連続だ[7]」と考えているように，とにかくJulienの意識の上では彼はhypocriteにちがいないのである。

ここでへこたれず「Julienはhypocriteでない」の方を正当化する手だてを考えるなら，Julienの考えているhypocrisieは普通のhypocrisieとは異なるのであり，しかもその意味のズレにJulienも，他の登場人物も，また読み手も普通気づかないのだとする他ない。

そこで次のように考えてみよう。このJulienの個人言語におけるhypocrisieは，心の内を決して直接外へ表わさないことを義務と見做すことを意味する，と。そのため彼は常に心の本当のところと全く隔った感情，意見を表わす記号や，あるいは真だか偽だかわからないような両義的な記号を発する。重要なのは，このことが定言命令であって，必要があろうがなかろうが必ずそうしなければならないということである。目的は関係なくて，本心を隠すことだけが大切なのである。それさえつらぬくなら，自己の行為が現実においてどんな結果をひき起こそうとも彼は無頓着なのである。

これは合目的性を重視する普通のhypocrisieとは当然大きく異なる。いわばhypocrisieという神を持った宗教のようなものだから，このJulienのhypocrisieを，culte de l'énergieならぬculte de l'hypocrisie（hypocrisie信仰）と呼んでみよう。

こうしてみるとJulienの行動の持つ宗教的様相が見えてくる。たとえばうっかりナポレオン崇拝という「本心」を暴露してしまったとき折れてもいない腕を縛りつけて自らを罰するJulienは，hypocrisieの実践者というよりhypocrisieの苦行僧と表現した方がぴったりくる（第1部第5章）。同じ章で「自分のhypocrisieに役立つ」と考えて教会に入っていくJulienは，その行動で何か得をするわけではないから，hypocrisieを行なっているというよりむしろhypocrisieの神殿に詣でているという印象を与えるではないか。

Julienはこの「信仰」にとらわれているのであって，決して「自由」であるとは言えないのである。

5．読み手には意図の虚構性がみえない。

さてこのhypocrisie信仰説から二つのことが帰着できる。まず一つは，このような妙な「信仰」を義務としてしまうと，当然心の中を卒直に表現する行動がとれなくなってしまうことになる。たとえば本当に愛を感じている相手にI love youが言えなくなってしまうのである。内気な青少年永遠の悩みといったところだが，とにかくこのままでは身動きできない。

そこでこういう場合Julienの心理は迂回路を通るのである，と考えてみよう。普通のhypocriteがある意図のもとにニセの外観をとりつくろうなら，Julienは逆にある言動をするためにニセの意図を自分に対してでっちあげるのである。こうすれば彼は形の上ではhypocriteのつもりでおれることになる。

Julienの愛の告白の場面はその典型的な例と見ることができよう。Julienはレナル夫人を愛しているので「hypocrisie信仰」の立場から，愛の言葉を発することを禁じられている。だから彼は，夫人を愛していないつもりになって，その上でhypocrisieの言葉として

愛を告白するのである。

ここで一つ重要なことを指摘しておかねばならない。それは，今述べたようなメカニズムが本当にはたらいていたとしても，読み手にはJulien＝普通のhypocriteと映らざるを得ない，ということである。何故ならこのような解釈は，読み手の知っているJulienの意図の裏に一つの顕在していない意図を想定して成立しているわけであるが，この「裏の意図」は「hypocrisie信仰」を仮定してはじめてその存在が要求されるのであり客観的基準による存在確認ができないからである。

もう一つ例を挙げよう。家庭教師たるJulienをレナル家から引き抜く役目でやってきたモジロン郡長の勧誘に対するJulienの反応である。

> 今度はJulienの番だった。もう一時間半もいらいらして待っていたのだ。彼の答えは完璧だった。特にその長たらしいことと言ったら司教の教書のようだった。何でも言っているようで，実は何もはっきりと言っていないのである。レナル氏に対する尊敬，ヴェリエール住民への敬意，そして立派な郡長さまへの感謝とがその中にあるらしかった。郡長は，自分よりジェズイットなのに驚いて，何か確かな言質を得ようとしたが無駄だった。調子にのったJulienは，練習のためのいい機会だというわけで，別の言葉を使って答えをやり直した。(第1部第22章[8])

「自分は今ウソをついている」というクレタ人のパラドクスを思わせる答え方だが，これも「hypocrisie信仰」の強制する態度と解釈できる。彼はレナル家を出る気はないし，少くともそれで得をしようという気はない，というのが彼の本心ならば，[9]モジロン氏や彼に依頼した張本人らしいヴァルノ氏自身へのJulienの答えは，読み手の印象とは反対に，嘘とは言えないのである。ただその本心を彼は素直には表現できない。それで「練習のためのいい機会」などというもっともらしい口実をつけて自分をだまし，わざわざ自分の本心を嘘めかしてしまうのである。この場合，Julienにはこういう態度しかとれないわけである。

ただこのようなJulienの姿は，読み手の目からは当然hypocriteに見える。この場合なら，あらわには書かれていないhypocrite的意図を自発的に想定してしまうからである。たとえJulienがあとでその意図の達成を自ら拒否しても読み手には，彼は気が変ったのだと解釈して納得する余地が残されているのである。

この例と先の例で指摘した「結局読み手にはJulienがhypocriteに見えてしまう」ということは，Julienと読み手との関係において重要な意味を持っている(第7節参照)。

6．hypocrisie信仰の「恩恵」が，読み手には自然なものに見える。

「hypocrisie信仰」説からのもう一つの帰着は因果性の問題にかかわるものである。先

に述べたとおり，「hypocrisie信仰」説によればJulienは行動の結果に対して無関心だということになる。ここで起る問題は，それにしてはJulienはいろいろな事であんまり成功しすぎるという印象を受けるということである。結果に無頓着な人間ならもっと失敗してもよさそうなものだが，Julienはレナル夫人を手に入れ，ピラール師に才能を認められ，社交界の花形マチルドを手に入れ貴族になる。少し話がうますぎるのである。

このことについて筆者にできる説明はあまり見映えのいいものではない。結局，話がそうなっているのだ，というだけの事であるから。しかしこのことを次のような言葉で言い換えることができるように思える。つまり，Julienのあがめるhypocrisieという神様はなかなか霊験あらたかで，信者たる彼に偶然という形で恩恵を与えるのである，と。そしてJulienはその偶然の恩恵を，自分のhypocrite的行為の当然の「結果」として受けとめる，あるいは受けとめたがるということなのである。

たとえば些細な例ながら，作品に登場したばかりのJulienを読み手に印象づける場面を挙げてみよう。彼を家庭教師に欲しいとレナル氏から申し出をうけたJulienの父が，事情をあきらかにしようとして息子を問いつめる件である。

> 「できるもんならでたらめ言わずに答えてみろ，本気違い。レナルの奥さんをなんで知ってるんだ，いつ話しかけた？」
>
> Julienは答えた。
>
> 「話なんかしたことありません。教会で見かけただけです。」
>
> 「見かけたっちゅうより見つめとったんじゃろ，厚かましい奴め。」
>
> 「そんな！ 父さんも知ってるはずでしょう，教会じゃ僕には神さましか見えないんだ」とJulienが付け加えたのには，ちょっとしたhypocriteの調子があった。彼によるとこういうのが平手打ちを避けるのに最良の手段なのである。(第1部第5章[10])

結果としては結局なぐられなかったのだが，それはhypocrisieのせいなのだろうか。急に金づるになりそうになった息子をソレルじいさんはこれ以上なぐる気はなかったかもしれない。しかし重要なのは，結果という観点から見れば当初の目的が達成されているので一応hypocrisieが有効だった形になってしまっているということである。

今度はJulienにとってもっと重要な意味を持つ例を挙げる。心変りしたマチルドをもう一度自分のものにするためにJulienはコラゾフ公に教わった策略を実行に移して「成功」する件である。策略とは，フェルヴァック元師夫人を愛しているふりをして手紙のやりとりをすることである。つまりマチルドを故意に無視して逆に彼女の気をひくことが狙いなのだが，偶然彼女はJulienが元師夫人の手紙を封も切らず放ったらかしにしていることを見つけてしまう。このような事態はもとのプランでは想定されておらず，その意味でこのhypocrite的策略は失敗である。マチルドがもし普通の女だったら，あるいは真相を見

破ったかもしれないが，皮肉なことに，この瞬間にこそ彼女はJulienに屈服する。この場面は非常にアイロニックである。

マチルドは我を忘れて叫んだ。
「あなたはあの方とよろしくやっているだけじゃなくて軽蔑までしてるのね。あなたみたいな何も持ってない人が，元師夫人のフェルヴァックさんを軽蔑するなんて！」
「ああ，ごめんなさい」彼女はJulienの足元に身を投げた。「私を軽蔑したければして。でもそのかわり愛して。もうあなたの愛なしでは生きていかれません。」そして彼女は本当に気絶してしまった。
この高慢な女が，本当に，俺の足元に！とJulienはつぶやいた。(第2部第29章[11])

このように，事の推移は計画通りではないが，「hypocrisie信仰」を守れば，必ず成功がもたらされる形になっているのである。

ただし，Julienにとって，また読み手にとってこの特異な因果律はそれと指摘するのが困難である。一般的に言っても意図と，行為と，意図の達成があるように見えるとき，それらをそれぞれ独立のものと考えるのは大変困難なことなのである。[12] このことが次節で扱われるJulienと読み手との「共感」の問題に直接かかわってくる。

7．Julienと読み手との「共感」

ところで今見たようなJulienの行動に関する因果性の特殊さを指摘するのは別に筆者がはじめてではない。たとえば次のような論法はよくみうけられる。

Julienの努力は全て効果がない。効果がないからこそ彼の成功に貢献するのである。なぜなら誘惑者の役割を自分のものにしようとすればするほど彼はその無邪気なところを暴露するからである。(Grahame C. Jones[13])

この論法にはそれなりの説得力があるが，それだけに危険である。失敗するから成功する，自然さnaturelを暴露するから成功する，というのでは，『赤と黒』は単なるおとぎ話になってしまう。成功のために，意志の強さも，行動力も，何も必要ないことになってしまう。

だからこそこれまで述べてきたこと，即ちJulienが無理に自らをhypocriteとみなし読み手もそう思うこと，そして「hypocrisie信仰」が偶然成功をもたらすのをJulienも読み手も当然のことのように感じること，これらが重要になってくるのである。結論を先に述べると，『赤と黒』を読むことの魅力は，Julienと共に自分をレアリストであると信じながらおとぎ話に近い世界の中を進むことにある，と筆者は考えるのである。

ここまで「Julienは hypocriteではない」として論をすすめてきたが，筆者はそのことによって「Julienは普通の hypocriteである」とする読みを否定しさろうという気は毛頭ない。それどころか筆者が主張したいのは，仮りに「hypocrisie信仰」説が成り立つなら，逆に「Julienは普通の hypocriteである」として読みを遂行する方が，そのあとの正当化をどうするのであれ，むしろ本来的な読みであるように見えてくる，ということなのである。

「Julienは hypocriteである」とする読み手と Julien自身とは，行為の逆転した意味づけを共有している。即ち，「hypocrisie信仰」説の立場からみると，そういう読み手と Julienとは両者とも Julienの行為に恣意的で不当な〈hypocrisie〉というレッテルを貼ることによって，一種の共犯関係に入るのだと見える。またこのような読み手と Julienとは因果性の認識をも共有している。〈hypocrisie〉と名づけられた行為とみかけの意図の達成が継起的に出てくるために，両者の関係を偶然的ではなく因果的なものととらえてしまう。hypocrisieという言葉の意味的ひろがりが，諸事象間の関係を不明確なものにしてしまっているのである。

このようにして読み手は Julienの意志力と行動力を愛(め)でることができるわけである。筆者には，こういう読みのできる読み手こそ幸せな読み手であると思える。もしも架空の主人公に対する読み手の「共感」の程度が量られうるものとしたならば，『赤と黒』でこのような読み手が実現しているものは，その最も高い数値を示す部類に属するものと言えるのではないだろうか。

注

(1) 第2版，1985。なお以下の和訳は全て筆者によるものである。

(2) *Stendhal romancier,* Paris, Table Ronde, 1947, p. 195。

(3) *Stendhal et les problèmes de la personnalité,* Paris, Corti, 1958, pp. 311-12.

(4) 底本はPléiade版（1952）を用いた。以下引用の概当する個所の頁数を示す。pp. 291-92.

(5) 第1部第21章の最後のところ。p. 344.

(6) 第2部第40章。p. 669.

(7) 第2部第10章。p. 506.

(8) pp. 345-46.

(9) 「『でもあの申し出を受けようという気になったことは一瞬だってなかったんです』と Julienは言い張った。」（第1部第23章，p. 367）もっとも読み手はこの言葉も偽，あるいは少くとも誇張であると考える権利を持っているのだが。

(10) p. 234.

(11) p. 615.

(12) こういった因果性の問題は日常生活においてさえさまざまな困難をひき起すのに，虚構の文学においてはなおさらである。たとえばRoland Barthesは，読みの単位となるséquence は「既になされた」か「既に読まれた」の論理しか持っていないと述べている(*S/Z*, Paris, Seuil, Collection Points, 1970, p. 26)。

(13) *L'Ironie dans les romans de Stendhal,* Lausanne, Grand Chêne, 1966, p. 71.